

日本の建築家の郊外論にみる現代都市に関する思考

Thoughts on Contemporary Cities in Japanese Architect's Theories on the Suburbs

奥山研究室 20M50453 番場 崇 (BAMBA, Takashi)

1. 序

1-1. 背景と目的 日本において、郊外は鉄道の建設やモータリゼーションを背景に開発され、東京に代表される大都市では、広大な郊外が都心との境界なく連続し、社会・経済的に結びつくことで巨大都市圏が形成された。このように近代都市の発展とともに変化してきた郊外は、都市計画学や社会学といった様々な分野の専門家によって議論の対象とされてきた。そうしたなかでも建築家による郊外を主題とした論考（以下、郊外論）は、建築家ならではの実体的及び体験的な視点から郊外を捉え、都市を論じるものといえる。そこには没個性的な風景や理想的な生活像などのステレオタイプ化したイメージを超えた郊外に対する認識の広がりがみられ、そこから見出される知見は、郊外を規定してきた社会構造が変化しつつある現代における都市や建築のあり方を模索する上で重要であると考えられる。そこで本研究は、現代日本の建築家の著した郊外論を対象とし、その内容を検討することで、建築家の現代都市に関する思考の一端を明らかにすることを目的とする。

1-2. 郊外論の系譜と対象資料 まず、郊外がこれまでいかなる文脈で論じられてきたのかを郊外論の系譜として関連する社会背景とともに図1に整理した。郊外は1890年代後半から都市計画家や文筆家の論考に登場し、自然讃美や無秩序に拡大する都市化の制御といった視点から論じられる。高度経済成長期以降では、都市の拡大の最前線として郊外への関心が高まり、以降都市計画家、建築家による郊外論が多出するようになる。80年代には都市形成史の一側面としての視点、90年代には社会学者による現代社会の象徴としての視点、00年代には都市の縮退を見据えた視点など、内容は多様化していく。以上を踏まえ、本研究では郊外が議論の対象として広く認識された80年代以降の建築家および建築専門家¹⁾(以下、専門家)の郊外論を資料対象とした(図2)²⁾。

2. 都市と郊外の関係モデル

郊外とは都市との関係を前提とする領域的概念であるため、都市とのいかなる関係を前提に郊外を論じるかは、それぞれの論考の視点を捉える上で重要である。そこでこれを都市と郊外の関係モデル（以下、関係モデル）と

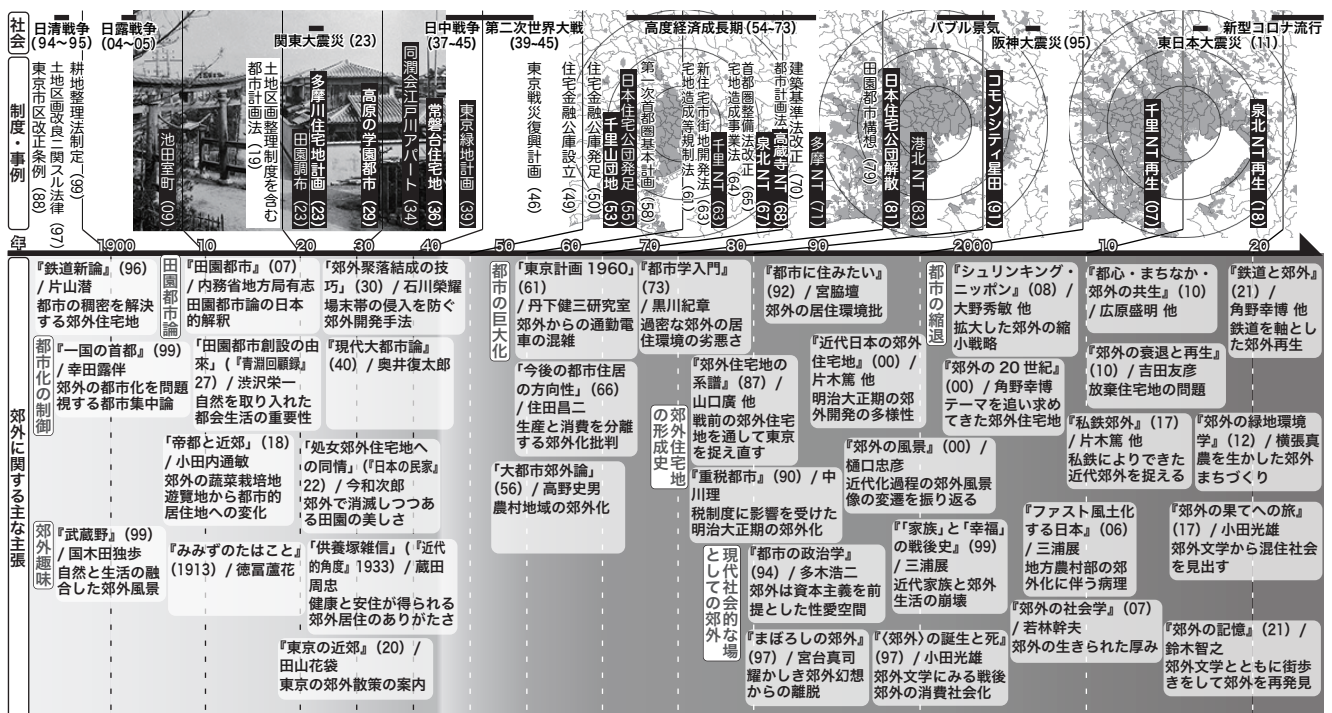
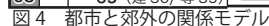
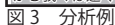


図1 郊外論の系譜

3. 郊外観の意味内容と時間の射程

《意味》は都市や社会における郊外の価値やイメージを論じるものであり、都市との関係から生じる性質に着目した「都市性」、郊外という場所そのものの特異性に



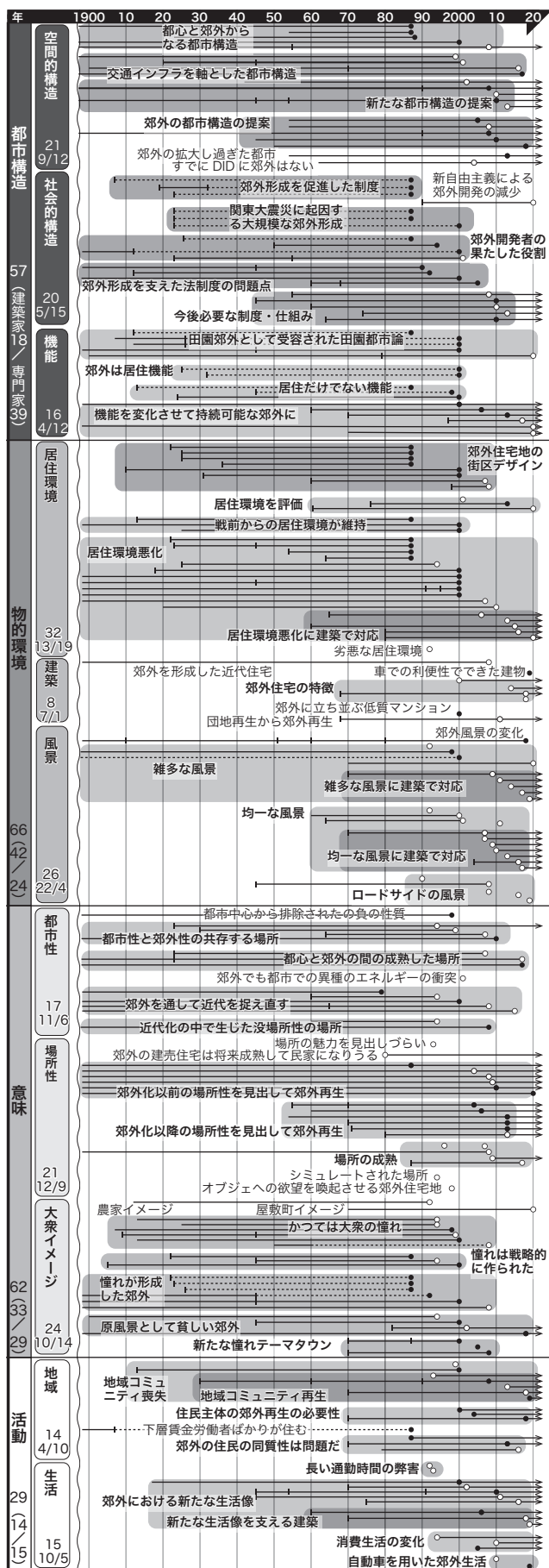


図5 郊外観の意味内容と時間の射程

着目した「場所性」、人々が抱く郊外に対する価値観に着目した「大衆イメージ」から捉えた。著者の属性に着目すると、「場所性」では建築家と専門家が同程度みられたのに対し、「都市性」では建築家が専門家の2倍程度みられた。これより、都市との関係から郊外の性格を再解釈する建築家特有の傾向を指摘できる。また、郊外を「場所の成熟」と捉える郊外観は建築家のみにみられ、没場所的と論じられることの多い郊外を捉え直す建築家ならではの郊外観であるといえる。

《活動》は郊外での人々の生活を論じるものであり、コミュニティに着目する「地域」と個人に着目する「生活」で捉えた。「地域」では専門家が、「生活」では建築家が多く、特に「郊外における新たな生活像」などの意味内容で未来への時間の射程をもつものが多い。これは郊外住宅地での住宅設計といった活動を通して、ボトムアップ的に新たな郊外像を模索する建築家特有の視点といえる。

4. 郊外論にみる現代都市に関する思考

4-1. 建築家の郊外論にみる現代都市に関する思考

2章で位置付けた関係モデルと、前章で検討した郊外観の意味内容について、建築家と専門家を比較しながら総合的に検討した(図6)。まず、建築家、専門家で傾向の違いがみられた【郊外独立】【都市対比】【都心対比】についてその特徴を検討する。

【郊外独立】【都市対比】では、建築家においては《都市構造》がなく、さらに専門家ではほとんどみられなかった《活動》が一定数を占めるという特徴がみられた。このことは、都市の外側にあるものとして郊外を論じる場合、都市生活で失われた郊外ならではのコミュニティやライフスタイルへの考察が建築家独自の視点として指摘できる。

さらに、【郊外独立】では建築家は《物的環境》が大半を占める(12/18)ことから、都市から分離して郊外での住宅のあり方やそこでの生活といった体験的な視点から郊外を評価しようとしているといえる。

【都心対比】では、専門家において《都市構造》が過半を占めたのに対して、建築家では《物的環境》《意味》も同程度占めていた。これより、都市の一部として郊外を論じる場合、郊外外風景の再評価や郊外特有の場所性

凡例	時間の射程
○ 建築家の郊外観	○ 現在の状況を捉える
● 専門家の郊外観	—○ 過去を通して現在を捉える
○ 郊外論の発表年にプロット	— 捉えていない時期
	○ 未来への展望や予測を示す

といったさまざまな観点から都市における一つの現象として郊外を論じるという特徴を見出した。

【連続】では建築家において《意味》が多くみられ、都市と郊外の連続を、観念的側面から論じるものであるといえる。

【重層】では明確な傾向の違いは見られなかったが建築家において《意味》のなかでも「都市性」が多くみられた。このことから、建築家は都市の重層した場所の性質を都市と関係づけて論じているといえる。

4-2. 東京における郊外論の地域的特徴

資料とした郊外論には、東京の具体的な地域において郊外を論じるものが多くみられたため、郊外観の具体的な対象地域を確認し、23区、近郊外、遠郊外とに分類した²⁾。建築家では近郊外、遠郊外を対象とする場合が多いのに対し、専門家では23区が多くみられた。これは建築家が具体的な住宅の設計などを通して近郊外、遠郊外に着目することが多いのに対して、専門家は、都市形成史的な視点から初期の近代郊外住宅地に注目することが多いためであると思われる。

【重層】の割合に着目すると、建築家では23区、近郊外に多くみられるのに対し、専門家では近郊外、遠郊外に多くみられた。このことから、建築家は都心と郊外の間に新たな性格をもった領域を見出すなど、都心方向に重層的に捉える傾向があるといえる。

5. 結 以上、建築家の郊外論を市と郊外の関係モデルと郊外観の意味内容から検討した。その結果、郊外を都市と分離的に捉え、郊外ならではの活動に着目し新たな郊外像を模索するものがみられ、また郊外を都市の一部として捉え、物的環境や意味の側面から論じるものといった建築家の郊外論の典型を見出すことができた。さらに、郊外に対する認識が都心との距離に応じて変化することを明らかにした。これらは社会的状況に応じて変化する現代都市を郊外との関係という観点から捉え直すための新たな視座を示すものであると考えられる。

- 1) 建築・都市計画家、歴史家、評論家を建築専門家と定義した。
- 2) 「郊外」をタイトルに含み、郊外を主題とした論考を国立国会図書館オンラインの検索システムなどを利用して収集したものに加え、書籍・主要な建築系専門誌（『新建築』『住宅特集』『建築文化』『都市住宅』『10+1』）に発表された論考のなかから、郊外に関する明確な主張がなされていると考えられる論考を補助的に加えた65資料を建築家の郊外論とし、専門家の郊外論についても同様に書籍を中心に収集した。
- 3) 都心から40km圏内かつ23区外の地域を近郊外、都心から40km圏外を遠郊外と定義した。

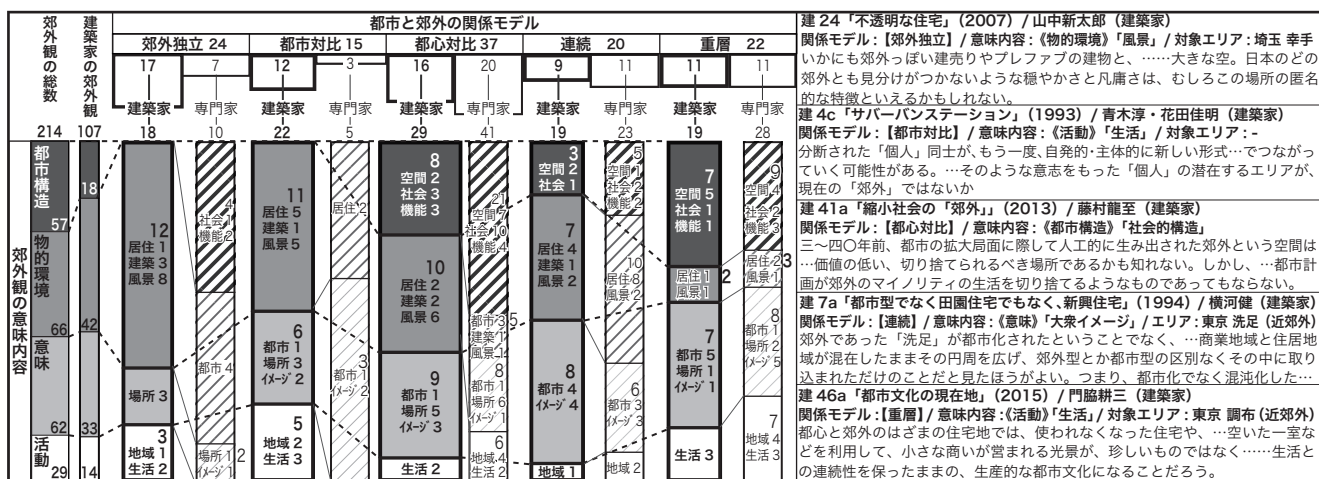


図6 建築家の郊外論にみる現代都市に関する思考

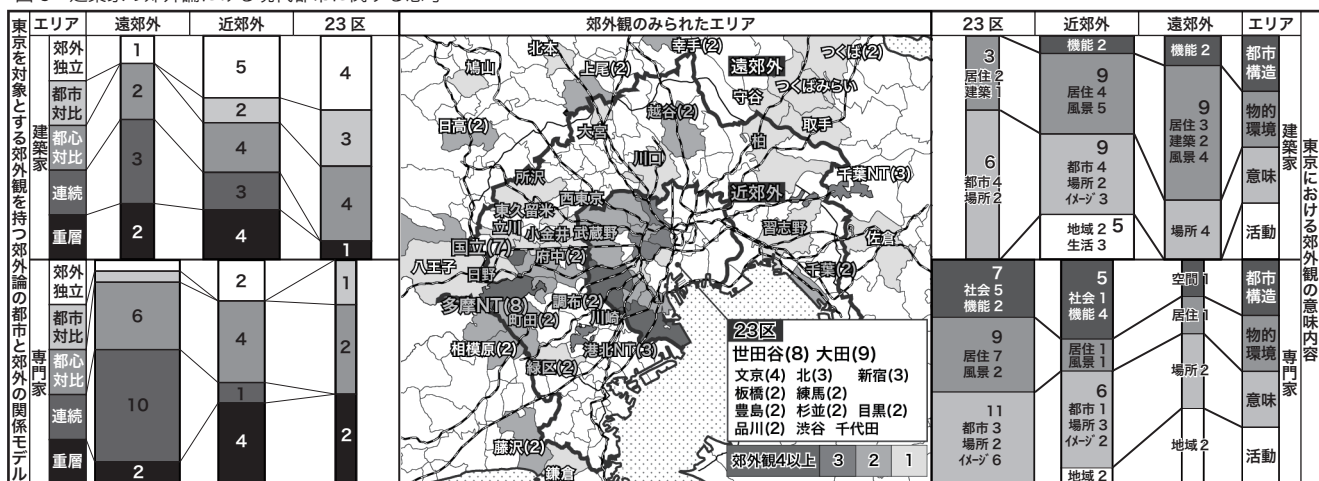


図7 東京圏を対象とした建築家の郊外論の地域的特徴